巻頭言

講座での出来事

臨床教育学講座紀要第11号をお届けします。主たる出来事として、2010年10月18日には、前年度に引き続き、矢野智司教授を中心に、東京藝術大学美術研究科の芸術教育研究室院生との交流会が開催されました。木津文哉先生のご指導のもと、臨床教育学講座の大学院生も制作活動に参加し、あらためて「観ること」「描くこと」「身体の在りよう」「作品」「藝術」といった事象への考察を深めることになりました。2010年8月10－13日、2011年12月8－10日には、ロンドン大学教育研究所ポール・スタンディッシュ教授をお迎えして、斉藤直子准教授と共に「国際教育研究フロンティアC」の授業が開講され、また2010年8月18－19日にはロンドン大学教育研究所との第四回国際会議が、2011年12月17日には第五回国際会議が開催されました。

活発な出版活動も行なわれています。教員の主たる業績は、以下の通りです。和田修二・皇紀夫・矢野智司共編著『ランゲフェルト教育学との対話 ── 「子どもの人間学」への応答』(玉川大学出版部、2011年)、西平直著『魂のライフサイクル ── ユング・ウィルバー・シュタイナー（増補新版)』(東京大学出版会、2010年)、同訳、E.H. エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』(中島由恵と共訳)（誠信書房、2011年)、鎌田東二編『モノ学・感覚価値論』(晃洋書房、2010年)、同著『現代神道論 ── 霊性と生態智の探究』(春秋社、2011年)、Naoko Saito, “Leaving and Bequeathing: Friendship, Emersonian moral perfectionism and the gleam of light,” in: *Emerson and Thoreau: Figures of Friendship,* John T. Lysaker and William Rossi (eds) (Bloomington: Indiana University Press, 2010): pp. 172-185、“From Meritocracy to Aristocracy: Towards a *Just* Society for the 'Great Man',” *Journal of Philosophy of Education,* Vol. 45, No. 1 (2011): pp. 95-109。さらに、大学院生も以下の通り、数々の業績を残しました。井藤元「ゲーテ＝シラーへの複眼的眼差し ── 人智学の通奏低音としての『美的書簡』」『モルフォロギア ── ゲーテと自然科学』第32号（ナカニシヤ出版、2010年): pp. 93-113、「人智学の基盤としてのゲーテ自然科学 ── 自己認識への準備 ──」『ホリスティック教育研究』第14号（日本ホリスティック教育協会、2011年): pp. 58-72、奥井遼「『開かれた身体』を求めて ── 嘉納治五郎と植芝盛平の身体観を手がかりに」『人体科学』19号（2010年): pp. 45-53、「メルロ＝ポンティにおける『間身体性』の教育学的意義 ── 『身体の教育』再考」『京都大学大学院教育学研究科紀要』57号（2011年): pp. 111-124、広瀬悠三「カントにおける啓蒙思想再考 ── 世界市

民性と地理的思考に着目して ──」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 57 号（2011 年): pp. 67-79、「カントの教育思想における幸福の意義 ──『感性的な幸福』と『最高善における幸福』の間で ──」『教育哲学研究』第 101 号(2010 年): pp. 100-117、坂井祐円「理念としてのスピリチュアルケアについて ── ケアの場にはたらくスピリチュアリティの自覚的様態」『人間性心理学研究』28 巻 1 号（2010 年): pp. 49-61、「「死者との実存協同」の思想とグリーフケア」『ホリスティック教育研究』14 号（2011 年): pp. 30-46、グェンティ ホンハウ「触れる ── ブーバー対話思想の反転の力学」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 57 号（2011 年): pp. 97-109 などです。さらに、この間、以下三名の講座卒業生が博士論文を提出し学位を取得しました。池田華子「シモーヌ・ヴェイユに見る「関係」の創造性 ──「創造的注意」に基づく臨床教育的関係論 ──」（2010 年 05 月 24 日）井谷信彦「存在論と「宙吊り」の教育学 ── ボルノウ教育学の再考を軸に ──」（2011 年 3 月 23 日)、井藤元「シュタイナー人間形成論における「自由」の構図 ── 試金石としてのゲーテ、シラー、ニーチェ ──」（2011 年 3 月 23 日)。

特集「ロンドン大学教育研究所－京都大学大学院教育学研究科第四回国際会議」

本号では「ロンドン大学教育研究所－京都大学大学院教育学研究科第四回国際会議」“Finding Meaning, Cultures Across Borders: International Dialogue between Philosophy and Psychology”（「意味作り、境界を横断する文化：哲学と心理学の国際的対話」）（京都大学時計台記念ホール、2010 年 8 月 18-19 日）から生まれた英語論文を特集として掲載いたします。本会議は、先述の「国際教育研究フロンティアＣ」（単一の言語は単一の世界を形成するか：意味作り・翻訳・「他」文化理解）の授業と連関させる形で、大学院生の国際的発信能力を高めることを目指して企画、開催されました。スタンディッシュ教授の基調講演 One Language, One World: the common measure of education”（「ひとつの言語、ひとつの世界：教育を測る共通尺度／教育が測るわれわれの共通性」）に引き続き、京都大学大学院教育学研究科の教員、大学院生とロンドン大学教育研究所の教員、大学院生が英語で発表を行ないました。他講座、他大学からの参加者も交えた国際的、学際的な議論の場で、臨床教育学講座の参加者の知見が文化の境界を超えて試され、交流の輪が広がりました。この過程で、参加した講座の大学院生は、ロンドン大学教育研究所の大学院生から論文執筆の指導、助言を受けて論文を発表しました。そうした指導や対話交流の軌跡と成果が本号「特集」には掲載されています。この国際会議に参加した講座大学院生の広瀬悠三氏は、その後 2011 年 6 月よりスタンディッシュ教授のご指導の下、ロンドン大学教育研究所に留

学しました。また、毎年3月下旬から4月の初めにオクスフォード大学で開催されるイギリス教育哲学会を初めとする国際学会で講座大学院生や卒業生が参加、発表し、世界各国の研究者との交流のネットワークが構築されるようになり、イギリス教育哲学誌に厳しい査読を経た英語論文が出版されるなどの成果も生まれました。こうした国際交流を数年をかけて可能にし、臨床教育学講座の教育研究に多大なご尽力を下さっているスタンディッシュ教授に謝意を表すると同時に、講座大学院生のさらなる国際的な活躍を願っています。

2012年2月17日

齋　藤　直　子